



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.264

2025.9.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

加曾利B式土器

—『日本先史土器図譜』と現在—

鈴木 正博

● 第65回 ● 「加曾利B2式」の総合的な独立性

『図譜』「B2式」は大森貝塚の学史的な重要性や優秀な資料とは独立している。『図譜』「B1式」解説文に「加曾利B式の細別については、自分は数年来構想を練って居たのであるが、未だに明快に指示し得ないで居る。」との逡巡を吐露し、『図譜』「B2式」解説文の「図版の数が少ないため、全体の構成を示すことが出来なかった。」との弁明は、即座に本連載第46回を想起させる。即ち、真相は「大森式」や「大森式菱形土器」等の手垢に塗れた煩わしさと訣別し、原点である椎塚貝塚に則り、常南総北の新たに独立した「土器型式」を以て再生を企図したからであろう。

『図譜』の加曾利B式「精製土器様式」は器種別「範型」から構成され、層位及び器種別「範型」の文様帯から「細別」が決定される。本連載第58回の「土器型式」制定アルゴリズムを振り返るならば、『図譜』「B1式」は複数の標本対象遺蹟間から層位と強い類似の文様帯により導出される「横の構造」に止まらず、「横の構造」とは文様帯の類似を異にする複数遺蹟から導出される「縦の構造」も含み、現在の研究では『図譜』「B1式」は内部に新たな「細別」構造を窺る。故に『図譜』「B1式」は文様帯としてある一定の変化幅を受容する等共通性が弱い位相の標本から構成される。

これに対して『図譜』「B2式」の出土遺蹟は常南総北の近傍に所在し、層位的な纏まりにも恵まれている。故に標本間や標本対象遺蹟間で内部に型式学的な「細別」構造を穿つのは困難で、文様帯としては極めて共通性が強い位相から構成される。加えて敗戦後には「コロボックル考古学」による学史的な「関東式」として「椎塚-宝ヶ峯」間の「全く似たる土器」との系統論(本連載第40回参照)が再び脚光を浴び、改めて関東北～北海道に至る広域で共通性が強い位相((2024)「宝ヶ峯断想」『利根川』46)に刺激され、自ずと「大森式菱形土器」への関心も移る

いを見せる(南山大学保管の寿能遺蹟出土土器を契機とする関心の高まりに期待したい)。

では、『図譜』「B1式」から「B2式」への推移に山内清男の思う処はどうであろうか。まずは文様帯の「分断」と独立性の関係である。『図譜』「B1式」解説文は「加曾利B式の古い部分は堀之内新形式に近似し、種々の器形装飾を有して居る。」と「堀之内2式」の「道統」ペクトルを明示し、『図譜』「B2式」解説文は「加曾利B式の中位の古さ及び新しい部分に於いては器形も装飾も段々変わり、堀之内式からは遠く、安行式に似たものになって来る。」と「堀之内2式」の「道統」ペクトルは遠くに霞み、替わって転換が図られ「安行式」への「道統」ペクトルが強調される。畢竟、「B1式」から「B2式」への「道統」ペクトルが行方不明の独立した存在となり、前回指摘の『図譜』標本の「B1式」と「B2式」は層位的かつ型式学的にも分断される。」に至る。

次は、『図譜』「B1式」から「B2式」への形態・装飾の「変遷」と独立性の関係であるが、山内清男は椎塚貝塚の大量に出土する「粗製土器様式」を以て夫れに充てる(加曾利B式総体として「粗製土器様式」が地方差の要になる、とは山内清男晩年の心したい指摘である)。『図譜』「B1式」は土器の解説文冒頭で「最も多いのは比較的粗製で湾曲の無い、又は著しくない深鉢形又は鉢形であって、外面には縄紋のみ、又は縄紋の上に二尖の棒端を引き擦って付けた条線を付けて居る。」との標本に廻戸貝塚5例(図版27・28・29)を掲載し、装飾例の図版27を第72図に示す。これに対し『図譜』「B2式」でも土器の解説文冒頭で「粗製土器の大多数は頸部に湾曲のある、口縁外側等に隆線を配し、体一面に縄紋又は縄紋と粗雑な斜線を伴うものになる。」との標本として最適江原台遺蹟例(図版33-1)を掲載し、これを第

73図に示す。

『図譜』「B1式」の第72図から『図譜』「B2式」の第73図への両標本は共に「口縁外側等に隆線を配し」、かつ「縄紋と粗雑な斜線を伴うもの」を選定しており、第72図→第73図への年代的推移は①形態の変遷を「頸部に湾曲」の有無に、②装飾の変遷を「粗雑な斜線」の体部一面施文から頸部と胴部の区画別施文への違いに窺る。しかも第73図は層位的にも学史的な「遠部第一類土器」(池上啓介(1937)「千葉県印旛郡白井町遠部石器時代遺蹟の遺物」『史前学雑誌』第9巻第3号)の一部に過ぎず、改めて他の口縁と頸部下端等の外側二ヶ所に各一条ずつ二条隆線貼付による区画別施文への独立した変化にも注目する。この様な「B1式」と「B2式」間に生じる形態と装飾の独立した相違は、「道統」ペクトルとして連続する形態学的変化とは異なり、中間形態が借定される。

「粗製土器様式」の形態学的変化と型式学的変遷は文献(1980b・1981)を嚆矢とするが、文献(2003)では吉見台遺蹟に於ける「B1-2式」や「吉見台系列」の隆線貼付に触れ、第72図とは異なる二条貼付が一般的で、間隔の狭いものから中間に文様を挿入させるように間隔を広く取るものまで様々あるが、間隔が広くなる現象に「遠部第一類土器」への滑らかな推移を窺る。「中間型式」としての位相である。



▲第72図:『図譜』「B1式」図版27 (廻戸貝塚)の「粗製土器様式」



▲第73図:『図譜』「B2式」図版33-1 (江原台遺蹟)の「粗製土器様式」

※巻頭連載は隔月です。次回は鴨志田篤二さんです。

目次

■加曾利B式土器 「加曾利B2式」の総合的な独立性(第65回) 鈴木正博 …1
■考古学の履歴書 私の考古遍歴(第16回) 工業善通 …2

■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト(第256回) 高橋 香 …3
■考古学者の書棚「人はなぜ戦うのか—考古学からみた戦争—」 杉山和徳 …4

考古学の履歴書

私の考古遍歴 (第16回)

工楽 善通

1976年5月になって、埋文センター研究指導部長であった田中琢さんから、沖縄県の文化財を見て来るように言われた。'72年の本土復帰前、文化庁に在任中、記念物課の調査官が、次々と沖縄へパスポートを持って出張していたことを思い出し、私もその遺跡を是非訪ねたいものだ、よろこんでわくわくした。もちろん南島行きは初めてであったので、色々調べて、飛行機で一気に那覇まで行くのではなく船便で途中の島々に寄りながら一昼夜かけて行く便を選んだ。船上ではほとんどデッキに出て、有視界航行の有効性を見たいので、鹿児島港発19時30分の定期便で、3等のザコ寝大部屋船室で充分と判断して、個室はとらなかった。

種子島・屋久島や、いま連日ニュースで報じられている群発地震のトカラ列島付近は暗闇で、遠く離れていたせいか島影も見えなかった。夜明け前になって、間もなく奄美大島に到着するので準備するよう伝えられた。甲板にもライトが灯り、名瀬港に着いて港には車や人が動くのが見えた。間もなく船上のクレーンが動き出し、港岸で群がっていた牛や豚が、数頭ずつ網のシートに包まれて吊り下げられて、船底のどこかに入れられていくのが甲板上から見えた。客の乗下船はとくに終っても、この家畜の積み込みは7~8回繰り返されて、次の徳の島へ向った。この島では豚だけですぐに出航し、次の沖永良部島へ向った。この頃にはもう正午であり、昼過ぎには最後の与論島に寄港しすぐさま出航、夕6時頃には那覇市の泊港に着いた。沖永良部・与論の2島では家畜の乗船はなかった。この家畜の那覇への運搬は、かつて佐原さんから沖縄での肉食事情について聞いていたので、なるほどな~と思ったし、沖縄では肉を切る俎板が、木の年輪が丸く見える木口を用いており、中国から入って来た風習だと教えてもらったので、那覇ではその現象を実見したい。

縄文・弥生人達は果たして小さな丸木舟を操作しながら、夜は北極星を目印にし、日中は視界航行が出来たのだろうか？ 私は極めて難しいのではないと思う。

翌日からの2泊3日の見学日程は、出発前に県教委文化課の金武正紀さんと連絡をとり、見学予定の2~3遺跡の私の希望以外は、すべておまかせした。那覇初日より金武さんに車で同行してもらって約15km北へ行った処の中城(ナカグスク)城跡へ案内してもらった。沖縄で初めて見る城跡で、14~15世紀に存在したもので、石垣で囲まれた郭列が整然と良く残り、芝生で囲まれた姿は写真で良く見るイングランドの遺跡を思わせる異国的なものだった。

石垣は本土で見られているものとは大違いで、琉球石灰岩の切石を用いて丁寧に角に面取りしたものを積み上げていて、各門はアーチ形になっていた。ここから東海岸に出てまた15kmほど走って与勝半島付け根にある勝連城跡に行った。本城は復帰年に史跡となったものであり、2000年には世界遺産として登録された。車を降りて長い道のりを歩いて主郭に登ると、180°開けた太平洋を望むことが出来たのが印象的だった。見晴しの良い所であったので、ここで金武さんから各方向に位置した遺跡の説明をもらって、沖縄考古学の概説を受けたことは今でも私の宝である。昼はソーキそばを食べたであろうが覚えていない。(島で積み込んでいたあの豚である。)

午後は西海岸を北へ少しすすんで座喜味城跡を見学した。ここも復帰時に国史跡となっている。崩れた部分もあるが、広大で高い城壁が威勢を誇っているようであった。さすがここも世界遺産となった。那覇への帰路は長い距離にわたって嘉手納米軍基地のフェンスに沿って走り、それを過ぎると又、普天間米軍飛行場の鉄条網堀に沿って進むという具合で、もちろん初めての経験で、米軍

基地の広さに驚いた。

この日の夜は、那覇市内の中心部から東へ少し離れた「うりずん」という伝統料理店で、集まったのは、県文化財課の関係者で、かつて奈文研の研修を受けた旧知の面々で、再会を喜び合った。金武さんはもちろんのこと、琉球政府の頃から在席の知念勇さん、当間嗣一さん、安里嗣淳さんで、奈良での思い出話に花が咲き、沖縄考古学の現状について色々教わることが出来た。その後、知念さんは県埋文センター長となり、当間さんは沖縄県立博物館の学芸課長となり、安里さんは県内どこかの市教委に移られ、金武さんは那覇教委に移り、後に市立「やちむん」博物館へ移られ、ともに初期の沖縄県の埋蔵文化財行政を支えた諸氏である。皆さん今もお元気の様子である。

次の日は西表島へ案内してもらうことになっている。私は飛行機で直接行けるものと思っていたが、それは無理で、途中石垣島まで飛び、そこから船で約1時間で着くと金武さんは教えてくれた。そして西表島では金武さんの奥さんの実家があり、既に奥さんはそちらに居て、今日はその実家に泊まるということをご報告され驚くと共に申し訳ないと思った。

奈良に居る時には、日本列島の最西果てに近い八重山群島の西表島まで行けるとは思っていなくて、本当に意外であった。しかし心は浮き浮きである。朝8時過ぎにホテルを出て、私の希望である多くの市民が利用する公設市場へ連れて行ってもらい、色鮮やかな南海の魚類や野菜、そして豚の解体現場などをこの目で確かめたいと思っていた。弥生人の貝輪の材料であるゴホウラ貝も並んでいるかと思っただ、金武さんいよるとほとんど出ることは無いとのこと。豚の頭が丸い俎板上にのっているのは2店で見ることがあったが、解体作業には出くわさなかった。それから急いで空港に向い、昼過ぎには石垣島に着いた。そこでお会いしたのが石垣市教委文化課の石堂徳一さんと、昼食中に八重山群島又は先島諸島の考古学編年は不思議なことに、縄文時代後期相当の下田原(しもたばる)式土器の次に、無土器期が紀元後300年頃から約900年間続き、貝斧や石斧のみしか出土しないという。私が学生であった'60頃に、縄文時代以前の石器文化を無土器文化と呼んでいた時があったので、これと同等と勘違いされそうだから名称の変更を提案した。その後、今まで先島で多くの発掘調査がなされてきたが、この無土器期の事象は、今でも現実のようであるようだ。

石垣島を連絡船で出て西表島の北海岸の港に着いたのはもう夕刻近くだった。金武夫人の実家は、近くの上原という町で集落名はもう忘れてしまった。夫人のご両親は健在で、荷物を置いたのち、近くの遺跡の見学に出かけた。夕食は父上がさきほど捕ってきたガサミという大きなカニと地元の泡盛を満喫した。翌日は亜熱帯の森林を少し歩いたのち那覇へ向い、沖縄の最後に島南端にある摩文仁の丘にある平和記念公園に立ち寄って空港へ行った。

略歴

1939年	兵庫県高砂市に生まれる
1958年	兵庫県立高砂高等学校卒業
〃	明治大学文学部史学地理学科入学
1964年	同 大学院修士課程修了
〃	奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部へ入所
1969年	文化庁記念物課へ出向
1973年	奈文研平城宮跡発掘調査部第2調査室へ配属
1992年	奈文研飛鳥資料館 学芸室長
1995年	埋蔵文化財センター長
1999年	奈良国立文化財研究所定年退職
〃	(財)ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所勤務
2001年~2021年3月	大阪府立狭山池博物館館長

隔月連載です。次回は山本暉久先生です。

リレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 256

史跡 下寺尾官衙遺跡群 ～神奈川県茅ヶ崎市

高橋 香

郡家・古代寺院・川津の3点セットがみつかった遺跡群

史跡・下寺尾官衙遺跡群は、神奈川県茅ヶ崎市に所在する高座郡家・下寺尾廃寺を中心とする遺跡群です。西にむかう舌状台地の先端に郡家、台地下となる砂丘間凹地に古代寺院があり、その西側には川津・祭祀場があったことがわかっています。下寺尾官衙遺跡群の調査は、茅ヶ崎市教育委員会、(公財)かながわ考古学財団、玉川文化財研究所が調査を行い、史跡指定後は茅ヶ崎市教育委員会による調査が進められています。私自身は下寺尾廃寺や小出川河川改修関連遺跡群の調査で、発掘現場、出土品等整理作業並びに報告書刊行で携わりました。ふるさとでもある茅ヶ崎にこのような貴重な遺跡があることを多くの方に提供いただきたく、この遺跡を「推し遺跡」として紹介したいと思います。

高座郡家

現在、郡庁、正倉、館・厨が確認されています。郡庁は、二時期あることが確認されており、正殿を中心として、北側に後殿、東側に脇殿が配される前期、柵列によって正殿が区画される後期に分けられます。その後の調査で、正殿の西側にも建物が確認され、東西対象ではないですが東西に建物があつたことがわかりました。正殿は7間×4間の四面廂掘立建物で、建て替えがあつたことが確認されています。郡庁の北側には3間×3間の総柱建物が4棟東西方向に並び、その南側に2間×12間以上の側柱建物が確認されています。これらは正倉に想定されている建物群と考えられています。郡庁と正倉の間には、掘立柱建物と竪穴建物がみつっていますが、建物の構成や、「厨」と書かれた墨書土器が出土していることなどから館・厨と考えられています。郡家の時期は、7世紀後半から9世紀前半と考えられていますが、「厨」墨書が書かれた土師器の年代観が9世紀中ごろのものとされることから、もう少し郡家の存続時期が延びる可能性も考えられています。

下寺尾廃寺の瓦の謎

下寺尾廃寺からは数多くの瓦が出土していますが、創建期に相当する軒先瓦は未だみつかりません。時代を示すヒントとなる創建瓦は軒先がありませんが、桶巻きづくりの丁寧な平瓦があること、また、側板痕跡のある丸瓦を使用していることから7世紀末から8世紀初頭には存在していた寺院であることがわかります。桶巻きづくりや一枚づくりの瓦が確認されていることから、瓦葺きの建物が継続して建てられていたことがわかります。一枚づくりの瓦を使用する時期は、相模国分僧寺・尼寺の再建期で使われている瓦と同じ形でつくられた同範瓦が出土します。軒丸瓦と鬼瓦がみつかりますが、この軒丸瓦も文様全体がわかるのが1点と河道址から小片が1点、で数が少ないです。鬼瓦も、全体像がわかるものが1点と破片が数点でいるのみで、不思議なことに軒平瓦は創建期の段階から1点もみつかりません。なお、軒丸瓦については、相模国府から出土する軒丸瓦とも同範であることがわかっています。国の要となる国府・国分寺と同じ文様意匠をもつことから、下寺尾廃寺の重要性が瓦からもわかります。

伽藍配置については、これまでの調査によって金堂、講堂に相当する建物は確認されていますが、塔は現在のところは不明です。金堂は丁寧な版築地業が確認されていて、礎石の抜き取り痕跡があることから礎石立建物であることがわかりました。講堂は掘立柱建物から礎石立建物へ建て替えをしていることがわかりました。

瓦も素弁軒丸瓦が出土しており、ここで初めて下寺尾廃寺オリジナルの瓦をみることができます。9世紀前半ごろになると素弁の文様意匠が相模国内全体でみられますが、下寺尾廃寺でも使用されたようです。塔については、陶製相輪が出土していることから、塔があつたことは考えられますが場所は特定されていません。しかし、まだ未調査地区もありますので、今後の調査をまちたいと思います。

川津・祭祀場

下寺尾廃寺の西側には旧河道がみつかり、北東方向から南東方向へ人工的に流れを変えている場所があります。川底には礫を敷き詰めた痕跡があることから、津として使用されたと考えられています。また旧河道にそって4間×2間の側柱掘立柱建物が規則的に立ち並ぶことから、川津で荷揚げされた物資を保管していた建物であつたことが想定されます。

また、旧河道では川津付近などから水辺の祭祀を行っていた形跡がありました。木製祭祀具とよばれる人形、絵馬、斎串などや人面墨書土器がみつかりました。人面墨書土器が2個体確認されていますが、そのうちのひとつがとても興味深い墨書土器なのです。墨書土器は、人の顔を書いたものが多く当時の人の姿を示しているといわれますが、川津で出土している墨書土器はまるで一つ目小僧のように描かれているため、「妖怪のはじまり」として考えている研究者もいるようです。その他、「神」と書かれた紡錘車や、壺Gが出土しています。こうした祭祀遺構は、下寺尾官衙遺跡群の近隣で確認されており、寺域の南側でも同じような祭祀遺構が確認されています。こちらでの祭祀は、川津の祭祀が律令的祭祀であることを考えると、どちらかというといくつかの民衆的な祭祀であつたことがわかっています。

なお、10月21日まで、茅ヶ崎市博物館にて「古代高座」の展示が開催されています。下寺尾官衙遺跡群の史跡指定10周年を記念した展示となっているため、成果が一目でわかるようになっています。

地域への還元

史跡指定されて10年がたちました。発掘調査で遺跡の重要性が明らかにされてきましたが、一方で学校の移転問題がいまだに解決されないまま、10年の月日がたっています。下寺尾官衙遺跡群の郡庁がたつ地には県立高校があり、遺跡保存に伴い移転するのか、現地に工法をかけて建て替えをするのか検討・協議が続けています。昨年、職場の企画で、県内市町村行政職員等が推し遺跡を紹介する「我が街の推し遺跡」のパネル展を開催しましたところ、その中の一つにこの下寺尾官衙遺跡群がありました。来場者から、「孫がこの高校に通学していた。重要な遺跡ということではじめていたけれど、現在そこに通っている子供たちのことも考えてほしいですね」とご意見を頂戴しました。過去の人々の生活を残し、地域の人たちに歴史の重要性を伝えていくことは大切なことでありますが、現在に生きる人々の生活も考えていかないとはいけません。史跡の保存、活用も大切です、学校教育も大切です。何か共存できることはいかに、解決される日が一日でも早くくるよう、一市民として切望されます。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは岩佐哉さんです。

考古学者の書棚

「人はなぜ戦うのかー考古学からみた戦争ー」

松木武彦／講談社 講談社選書メチエ213(2001)

杉山 和徳

昨今、社会情勢が著しく不安定である。2022年2月に開始されたロシアのウクライナ侵攻に伴う戦争は収束が見とおせず、戦火は世界各地に広がりつつある。改めて「人はなぜ戦うのか」を考えるための、よすがとして本書を選択した。後述するが、本書は私が本格的に考古学を学び始めた頃から、書棚に存在する1冊である。

「戦争」を考古学的に証明することには困難が付きまとう。そもそも「戦争」という行為の定義とは何なのか。本書では戦争は「集団間の戦い」とされ、個人の行為ではなく、社会的な集団が一つの意思と目的をもって行う行為とされる。さらに、戦争には、それに参加する各個人に対する共通の敵を設定し、それへの攻撃意思を統一し、全体として、社会の思想や規範の中にその戦いを意味があるものとして位置付ける社会的な操作が必要とされる。個人の攻撃行為(攻撃本能)とは別次元の問題と考えられており、その解明には、経済状況・生活形態・社会組織・政治体制・思想やイデオロギーを観察する必要がある点が指摘されている。

本書では、日本列島での戦いの始まりを弥生時代からと位置付け、古墳時代、古代、中世にまで言及し、アジア太平洋戦争や未来の戦争についても触れられており、日本列島における戦争を網羅しながら、戦いの本質に迫っている。考古資料を中心に論述される弥生・古墳時代の戦争に関しては、第二章から第五章まで言及されている。

私が特に興味をもったのは、日本列島における戦争の発生に関する部分である。本書では、稲作と共に「戦いの思考」が朝鮮半島から伝わったことが、弥生時代の戦いに発展したものと考えられている。世界のどの地域においても、戦いの痕跡は、九割以上が農耕社会成立以後に現れるという。これには、様々な要因が考えられるが、本書では主に三点があげられている。農耕によって生まれる富の奪い合いが引き金となって戦いが激化するという考え、農耕によって得られる穀物によって平均寿命が延び、出生数も増加することで人口が急激に増加し、それに伴う食糧不足を打開するため戦争が起こるという考え、大きな労働力をつぎ込んで開拓した耕地(テリトリー)を守る排他的な防衛意識が高まり、争いを激しくさせたという考えである。九州北部で認められた環濠集落・打製石剣・打製石鏃・傷害人骨といった戦いの証拠が、やがて西日本各地で認められることになる。渡来した「戦いの思考」は、稲作のためのテリトリー争いに火をつけたと考えられている。

本書では、外来の「戦いの思考」を皮切りとして、日本列島において時代とともに変化する戦争の形や武力表象、軍事的特質について言及されている。通史的に戦争を振り返ることで、気付いてくることがある。それは、社会が行きづまりを見せ、変革が望まれるときの手段として戦争が選択されることである。この点は、本書においても、「利得交換システム」として説明されている。そして、戦争は有力者のみの選択で起こりえないこ

ととされ、そこに戦争を抑制するヒントを見出している。

本書は最後に、戦争抑止の可能性について触れている。従来までの戦争の研究では、戦争を経済的もしくは唯物的に捉え、有力者ないしは支配階級が戦争の主体だと考えられることが多かった。これに対し本書では、有力者の武装や戦争の主導が、人々に対するあからさまな強制や抑圧によるものではなく、それを歓迎する下からのコンセンサスによって支えられていることが指摘されている。このコンセンサスに対する代償として、戦争を指導する有力者からそれを支持する人々に対して、有形無形の広い意味での利得が与えられる。社会の中で階級の差をこえた利害の上での多数派が形成されたときに、戦争は発動されると考えられる。この点において、戦争は支配階級と呼ばれる一握りの人々の自由意志によって発生するのでは決してなく、その社会に生きる全ての個人が行う選択(利得を受け入れるかどうか)の集合と、それらの相互作用によって初めて成り立つと本書では考えられている。縄文社会が戦争の証拠をほとんど残さないのは、それにいたる経済的・社会的な条件が欠如していたというよりも、人々の思想や行動規範そのものに戦争という現象が影を落としていなかったことが考えられ、人間の本能によって戦争が起こるものではないことの証拠である点が指摘されている。

人間の本能によって戦争が起こるものではないという説は、前述の日本列島における戦争の発生に「戦いの思考」自体が、列島外から伝わったという点とも符合する。著者の指摘のとおりであれば、現代社会においても、個人の選択の集合によって戦争を回避することは可能なこととなり、そこに希望を見出すことができるのではないだろうか。

個人的なことであるが、私が大学時代に鉄剣の研究を始めたのは、本書の影響が大きい。本書を読み、漠然と「戦争の考古学」なるものに興味をもったものの、戦争を考古学的手法で証明していくことには困難が伴う。結果的に、佐原真氏が取り上げ、本書においても指標とされた「戦いの考古学的証拠」の一つである「武器」、中でも主に墳墓における副葬品としての武器について取り扱うこととし、鉄剣を卒業論文のテーマとして選択した。そういう意味では、本書は私の研究の原点の一つである。

著者の松木武彦氏は、昨年の9月に逝去された。関東に着任されてからは、編集を担当したシンポジウム記録集へ玉稿をお寄せいただいたほか、古墳巡り等で御一緒させていただく機会もあった。改めて故人の御冥福をお祈りしたい。

アルカ通信 No.264

発行日 2025年9月1日
企 画 角張淳一(故人)
発 行 考古学研究所(株)アルカ
〒384-0801 長野県小諸市甲49-15 TEL 0267-25-0299
aruka@aruka.co.jp URL : <http://www.aruka.co.jp>